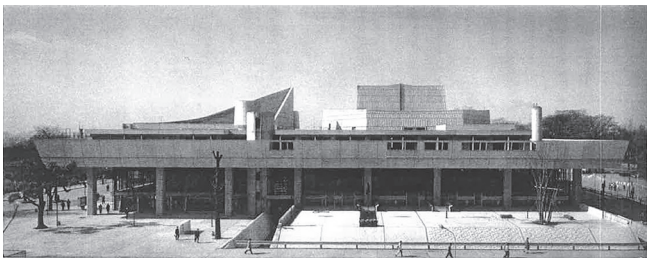
20世紀の建築空間遺産 24

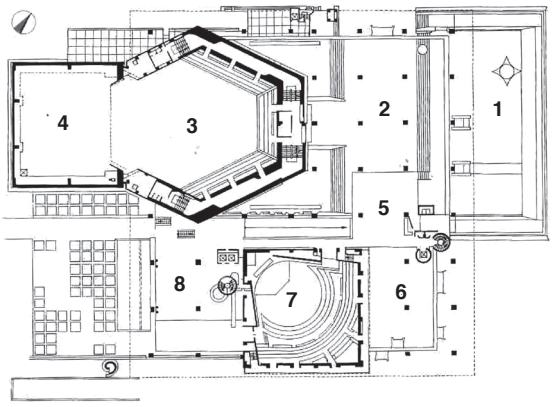
地域建築空間研究所 小林 良雄

東京文化会館　1961年　前川國男

国立代々木競技場　1964年　丹下健三／ウルテック

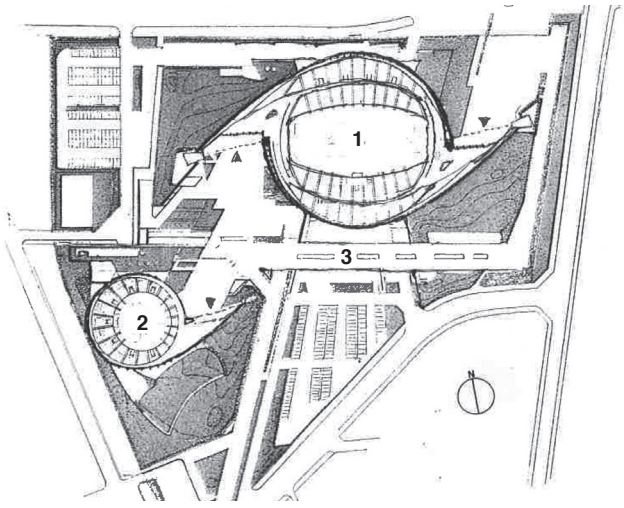


東京文化会館　北側全景（「生誕100年前川國男建築展」カタログより）



2階平面図　1 テラス　2 大ホールホワイエ　3 客席上部　4 舞台上部
5 レストラン　6 入口ロビー上部　7 小ホール　8 小ホールホワイエ

国立代々木競技場　　第1体育館　南西側外観（筆者撮影）



配置図　1 第1体育館　2 第2体育館　3 歩行者デッキ

20世紀日本を代表する建築空間

これまで対象化せずにきた日本の建築を最終回であり二つ採り上げる。東京文化会館と国立代々木競技場である。

東京文化会館は上野公園の一画に建ち、大小二つのコンサートホールからなる。大ホール（2303席）は本格的なオペラの上演が可能に計画された。客席側は6角形平面で、4層のバルコニー席を巡らし天井高く気迫が漲る。室内楽用の小ホール（645席）は2階にあり、正方形の架構の中に舞台と客席を対角にセットし、奏者を聴衆が囲み親密感がある。

上野駅側に聴衆と演奏者、各々の入り口がある。聴衆は入口ロビーに入り、2階にあるレストラン下へ進むと左手に小ホールへの斜路、さらに進むと広いホワイエに達する。天井高は7mを越え、公園の緑がガラス越しに見える。10.8mグリッドで建つ角を丸めたコンクリートの独立柱は公園の大樹に呼応し、反り上る大庇は外部を呼び込む。公園・都市空間との一体感と日常からの解放感を感じる。

大小ホールのホワイエは離れているが同一天井面下にあり、幅広の斜路で繋がり連続している。1階には他に事務関係室、舞台レベルの地下に楽屋やリハーサル室、大庇に囲まれた4階に音楽資料室や大中小の会議室などがある。前年完成の類似の京都会館と環境、空間構成は異なるが、共に、都市空間を内包する建築として意義深い。

国立代々木競技場は前回の東京オリンピック時に米軍の代々木ハイツ跡地に建設された。吊り屋根構造の大小二つの体育館からなり、大は2本柱、小は1本柱でカテナリー曲線の上昇空間を形成し、頂部から自然光が注ぐ。

プランは、大は巴二つを逆転して重ねた形、小は巴一つの形である。それぞれ約1万3千席と4千席である。傾斜する地形に対応して歩行者デッキをL型に回し、大小体育館を関係づけ、デッキ下に必要諸室を収める。客席とアリーナを大きく包む空間は競技者と観客の一体感を生み、尾のように伸びる部分は、原宿側と渋谷側に向いて開き、観衆の入場や一斉退場にスムーズに対応する。吊り屋根構造による空間特性を十全に活かしている。

当初、大は水泳、小は籠球の競技場として造られたが、現在プールは廃され、各種の球技や体操競技に使われている。上昇する高い空間には縦横に躍動する競技こそふさわしい。世界的に見ても20世紀屈指の建築空間と言える。

これで、建築の空間に注目して選んだ遺産を巡る旅を閉じます。お読みいただきありがとうございます。